飛行服姿の武昌の写真を
遠い土浦の方に向けて黙祷を捧げました

（第一回予科練慰霊祭によせて）

甲飛九期　平山武昌
父　平山武治（鹿児島県）

〝朝じめり露けき園に咲く萩へ結ぶ白玉涼しくも見ゆ〟　自詠

先日は予科練慰戦没者慰霊碑建立委員会から、まことに結構な記念品と予科練之碑除幕・慰霊式典報告書をご送付くださいまして、本当に有難うございました。衷心から感謝感激の涙をもって頂きました。

立派な美しい記念品は早速先祖棚の「故武昌」の霊前に供え、花をかえ焼香して今は亡き吾が子へ報告しました。

そして報告書はその後入念に読まして頂きました。一字一句写真と照合しながら食い入るように読破しました。戦没した幾多の英霊も、草葉の蔭から感泣の涙を以て安らかに眠っていることだろうと思っております。また私達遺族にとりましても、かかる立派な慰霊碑を建立して頂いて、心から有難さに感涙の極みに浸って居る次第であります。

盛大にして壮観、厳粛なる除幕採点の式事が挙行されましたことを歓喜しています。

青葉若葉の薫風そよぐ五月二十七日は、南国の鹿児島、川内地方は文字通り紺青一色の空明り、美しい陽光はサンサンと降り注ぎ、えも言われぬ好日でありました。

嗚呼！今日は予科練にとっては由緒深い思い出の地・茨城県土浦で慰霊碑建立、除幕祭典の式事が挙行される日である。私は万感交々胸にこみあげてきました。

私はこの朝は午前八時半頃、花と水と線香を持って墓参りをして墓碑に額き、「故武昌」の霊へ事の次第を合掌礼拝と共に告げました。そして午後一時四十分頃には、私は妻と共に内の木戸の出口の市道に出て、妻は「故武昌」の飛行服姿の、平常居間に掲げてある写真を抱いて遥か遠い土浦の方、北東へ写真を向けてその上に花をのせて、二人同時に一分間の黙祷を捧げました。私も妻も顔は一面に涙に泣きぬれて暫時はそこに立ち止っていました。

思い出は土浦での今日の盛典、それに「故武昌」の幼時の頃―小学校や中学校時代の事、土浦、大井等の海軍航空隊頃の事―武昌の戦史の公法を受け取った頃の事、故武昌の二十二才までの事共がそれからそれへと走馬灯のように回想され、瞼に浮かぶ在りし日の姿が偲ばれて、家の内にはいってからも涙は止まらず二人共々泣きました。

私が二十七才、妻が二十三才の時の子で、私共にとっては長男でありました。ヤンチャでアバレン坊でありましたが、素直で熱血漢で、物のあわれを解する人からも好かれる子でありました。土浦から帰った時など「おとうさん、私が二十五になった時には短剣をつって帰ってくる」といって喜ばしていたものでありましたが―今となりましては正直なところ淋しいです。飛行服の写真に向かって何度言葉をかけても返答はしません、動きもしません。写真ですから当然のことですが、時々私はそんな判りきったことをする程忘れられないのです。「死児の年を数える」という諺がありますが、私も時々それをします。今生きていれば、数え年四十四才であります。

この度は色々ご尽力くださいまして有難うございました。建立委員会の方々にも、なにとぞ厚くお礼申しあげてください。

（昭和四十二年四月五日号掲載）